かったと思います。とくに私が所属していた西原ゼミは、日本学術振興会特別研究員や博士号取得者といった先輩が並び、「毎週がシンポジウム」の様相を呈していました。全国規模の学会で発表するよりも、西原ゼミで発表するときのほうが緊張しました。このような場で発表・討論させていただいたことで度胸もつき、博士論文提出などという無謀に挑んでいけたのだと思います。さらに、講座の院生主催の勉強会や研究会で学ばせていただいた後輩からの刺激も欠かすことができませんでした。私の博士論文が少しでも「論文」として体裁をもつのであれば、それは名古屋大学社会学講座という恵まれた環境があったからにほかなりません。

最後に。正直に申し上げて、いまでも博士（社会学）の実感はわかず、博士論文を振り返ることもままなりません。ただひとつだけ言えるのは、博士論文を書き終えた後、社会学を学びはじめた当初よりも社会学の＜面白さ＞を実感しています。博士論文完成までの過程で思い出される数多くのお世話になった皆様には、この＜面白さ＞を実践する研究で恩返しをしていきたいと思っています。

千里の道も一歩から

伍 国春

2004 年春、名古屋大学で再び学生となった。これは長年勤めた北京の大学の教職を辞めた後のことであった。このような選択をしたのは、日々の仕事を繰り返すうちに、自分は何を求めているのかを自問するようになったからである。学生を指導する立場になったが、自分にはまだそれに相応する研究能力がない。博士後期課程で厳しい学術的訓練を受けないとよい研究はできない。あれこれ悩んでいるうちに日本政府国費留学生に採用され、名古屋大学に留学できることになった。厳しい学術的訓練を受けて博士号を取りたいという一心で名古屋に来た。当時、この夢は実現できるかどうかわからなかったが、ひたすら努力すればよいと覚悟した。

いま北京の自宅で、名古屋で過ごした 5 年間を振り返ると、まるで別世界のことのように感じる。それは悩んだり、笑ったり、学問にふけったりする日々であった。名古屋には絶えず議論する場があり、互いの研究を批判しあうことで博士論文を完成することができた。「千里の道も一歩から」と言われるように、博士論文を完成するには少しずつの積み重ねが必要であった。その道は決して平坦ではなかったが、振り返ると 3 つの段階を経てきたように思う。まず一本目の論文、次には学会誌に載せた論文、最後は博士論文である。博士論文のボリュームは学会誌論文の 6～7 本分くらいで骨の折れる仕事だったが、一本目の論文は出発点なので研究生の時に大いに苦労した。

幸い私は一人だけで努力したわけではなかった。ゼミでの発表、名古屋大学社会学会での発表、学会での発表など多くのチャンスがあり、毎回一つでもよいから新しいことを言えるように努力した。当時は博士後期課程の院生が多く、博学の先輩たちから多くのアドバイスをいただいた。さらに博士後期課程 2 年の時、社会学講座に博士論文作成指導セミナーという制度ができた。みんなの前で研究構想を話すことで課題が明白になった。先生方や院生仲間と議論した日々を振り返ると、学問と出会う感動がしばしばあった。段階ご

とに適切なアドバイスをいただいたので、論文を書く楽しさが増した。

私は国費留学生だったので、アルバイトをせずに研究に専念できた。しかし、留学生には日本語や日本という壁があった。博士論文を終えた今でも、日本語の「は」と「が」を間違ったりする。同じ漢字を使っていても、日本人と中国人では漢字に対する感覚が微妙に違う。これと似たことだが、日本という壁もあった。評価される研究のあり方から女性の生き方まで、日本は中国とは多くの点で異なっている。幸い周囲の人たちから多くの助けを得て、これらの壁を乗り越えることができた。指導教員の田中重好先生はもちろん、多くの先生方から貴重な助言をいただいた。おかげで研究室の枠を超え、社会学の枠を超えて成長することができた。

留学生だからといって、大変なことばかりではなかった。留学生の立場から常に 2 つの社会を見ているため、得をしたこともある。インドネシアでの津波復興調査がうまくいったのは、現地の華人と中国語で交流できたからである。日本でも調査で地方へ行った時、留学生だから親切にしてもらったこともしばしばあった。中国での調査は、江西省の方言がわからなかったのでかえって苦労したこともある。振り返ってみると、私の研究は日本に留学したからこそ可能になったものである。日本の災害研究の蓄積や途上国支援の調査資料を活かすことで、グローバルな視野から研究を仕上げることができたのである。

最後に博士論文を完成できたのは、環境学研究科学生研究支援活動（2005 年度）、魅力ある大学院教育イニシアチブ（2006 年度）、豊秋奨学会研究助成金（2007 年 11 月）をいただいたおかげでもある。これらの財政的支援があったので、中国・インドネシア・日本の 3 カ国にフィールドを広げることが可能になった。こうして大きな目標をめざして、一歩一歩着実に進むことができた。

留学生活は人生の通過点にすぎない。留学生は母国に帰るとき、どのように評価されるかという課題に直面する。私は名古屋大学で身につけた方法を活かして研究を続けたい。博士論文を終えて、学者としてようやくスタートラインに立つことができた。これからも依然として努力が必要であるが、名古屋大学は私に研究者としての原点を与えてくれた。